

【研究ノート】

第二次世界大戦期イングランド北東部ミドルズバラ 市の都市・住宅再建問題に関する 住民意識調査の実態

——『ミドルズバラ市の戦時社会調査』の資料から——

本 内 直 樹*

はじめに

第二次世界大戦を契機にイギリス戦時連立政府は、総力戦体制の下、さまざまな領域で政府介入を推し進めていった。国民への介入も例外ではなく、中央政府はかつてないほど国民大衆に関心を向けはじめ、戦時世論や社会問題についての調査活動を実施していくことで国民生活の情報を掌握していった。各種の政府調査で明らかにされた「事実」は、戦後再建に向けた社会改革論者たちの政策立案議論の根拠として重要な意味を持った。本稿が課題とするのは、戦後再建政策のひとつであった都市再建計画の立案準備として実施された政府調査『ミドルズバラ市の戦時社会調査』を取り上げ、この調査報告における「都市・住宅再建問題」「地域コミュニティの再建」についての住民意識のありようを検討するものである。

そもそも戦時政府による社会調査の実施は1940年にその開始をみる。第二次世界大戦に参加したイギリスは、1940年4月、政府の戦争プロパガンダが国民の士気に与える影響を調査するため、情報省の国内情報部に戦時社会調査機関 Wartime Social Survey を設置した¹⁾。調査の指導にあたっていたのはロンドン政治経済学院 (London School of Economics) の社会科学者たちであったが²⁾、その極秘の調査活動や恣意的な世論操作についての疑惑がもたれ、国会や新聞紙上で表面化したため³⁾、1941年6月、戦時社会調査機関はアメリカのギャラップ調査機関調査員のルイス・モス (L. Moss) を最高責任者として改組されることとなった⁴⁾。戦後の政策立案を担う省・研究部局からの依頼に基づき、戦時下の国民生活・大衆国民世論・社会問題に関する情報調査を科学的手法に則り実施することとなった⁵⁾。例えば、戦時統制経済の下、衣類や食料の配給状況、国民の健康状態、勤労働員や疎開児童の状況、人びとの

*人文学部准教授—イギリス社会経済史

飲酒の習慣といった国民生活に関するトピックが広範に調査されていた⁶⁾。こうした政府調査の他に、この時期、大学機関や民間レベルにおいても社会調査が実施されていた⁷⁾。例えば社会人類学者のトム・ハリソンらを中心としたマス・オブザヴェイション・グループによる労働者階級の生活様式についての調査活動の展開など、イギリス国民生活のありように関心が高まりつつあったのは戦争と無関係ではなかった⁸⁾。第二次世界大戦を契機に社会改革ムードが高まる中、それまで自由放任主義の下、国民生活の実態に目を向けてこなかったイギリス政府が、一般の人びとの生活についての包摂的な社会調査に乗り出したことの意義は大きい。これはイギリスが戦争の早い段階から戦後の「より民主的な社会」を構築していくこと、そして国民の戦争参加への「報酬」として「揺りかごから墓場まで」国民生活を保障する現実的な福祉国家建設に向け、政府が介入路線へと舵を取ったことを意味した。なかでも戦後によりよい社会を築くうえで、都市住宅問題やコミュニティ再建課題を担う都市農村計画省は、早くから専門家らと協議を進めていたことはよく知られている。ドイツ空軍の爆撃によるイギリス都市の戦災被害はもちろんのこと、19世紀以降の工業化にともなう都市の住宅・衛生環境問題を抜本的に解決するためにも「都市再建」問題は、戦後の国家の一大事業のひとつと認識されたのである⁹⁾。

1944年、戦後再建議論が盛り上がりを見せるなか、都市農村計画省は、イングランド北東部ミドルズバラ市の都市再建計画の策定準備として、戦時社会調査機関に調査を依頼し、3,000ポンドの予算が組まれた¹⁰⁾。人口129,300人のミドルズバラ市は19世紀以降、製鉄工業を中心に急速に興隆してきた都市である¹¹⁾。ミドルズバラ市内の産業集積地帯には劣悪な労働者住宅群が密集しており、そこには低賃金労働者世帯が多くいた。世界恐慌にはじまる折からの産業不振は、労働者の失業不安を高めてもいた¹²⁾。戦時社会調査機関の上級研究員で労働者の生活実態調査に豊富な経験を持つ社会学者のデニス・チャップマン（D. Chapman）が、ミドルズバラ市の社会調査を統括することに決まり、最新の数学的統計学を駆使した世帯サンプル調査とインタビュー調査に基づく膨大で精緻な『ミドルズバラ市の戦時社会調査』（以下、報告書）が作成された¹³⁾。同報告書は、戦時下の市民意識が綿密に調査された内容として、また都市農村計画省による初の個別都市調査として重要な意義を持っている¹⁴⁾。筆者は、別稿で同報告書におけるミドルズバラ市の「住民の隣人関係・社会関係」を中心に、居住区や住宅タイプごとに市民の隣人意識や階級意識のありかたを検討し、「イングランド北部地域」に住む労働者・主婦層の近隣住民とのあいだの親密性の程度や相互扶助関係には、性差・地域差・階層差による「多様なありかた」がみられたことを指摘した¹⁵⁾。そこで本稿は、さらに住民の地域コミュニティについての意識や見解を探るため、同報告書のPart II～VIにかけての「都市・住宅再建に関する意識調査」の項目に限定し、これを検討するものである。第二次世界大戦期という世相の混乱と、一方で新しい戦後社会の到来への期待とが入り混じったこの時期に、①ミドルズバラ市の労働者・主婦層の都市・住宅再建に関する意識や思いはどのようなものだったのか、②地域コミュニティについての意

見やレジャーやショッピング活動をはじめとする社会生活上の問題点とはどのようなものだったのかをチャップマンの報告書をもとに明らかにし、ミドルズバラ市の戦後再建問題に対する市民の要望や意識のありようを整理し、これに若干の考察を加えることが本稿の目的である。

第二次世界大戦の社会変革ムードが高まるさなかの国民意識や社会の変容についての歴史研究は近年ますます進展をみせつつあるが¹⁶⁾、政府介入の一端とみなしうる戦時期の政府調査自体や、こうした調査に携わったイギリス社会学者が戦後社会の形成に果たした役割についての本格的な研究はいまだなされていない¹⁷⁾。そこで本稿は、第二次世界大戦期のミドルズバラ市社会調査というひとつの事例から戦後再建に向けた社会学者による政府調査活動、および調査結果にみられる住民意識の実態を明らかにするものである。

1. 戦時社会調査と科学的調査法

戦時社会調査機関は、最高責任者のモス、上級研究員のチャップマン、市場調査研究員のフランクリン (W. E. Franklin)、マス・オブザヴェイションからキャスリーン・ボックス (Kathleen Box) とトマス (J. Thomas)、国内情報部のブルークス (H. Brooks) のほかに 50 数名の常勤の面会調査員で構成された。

この戦時社会調査機関が適用した調査法とは、19 世紀の貧困調査で有名なチャールズ・ブースの調査法の伝統を継承しつつも、イギリスより統計技術の発達していたアメリカのギャラップ調査法に倣い、事実をより客観的かつ正確に把握しうる「科学的手法」が採られた¹⁸⁾。すなわち従来のランダムサンプリング（無作為抽出）とは異なり、サンプル（被調査者・世帯）を各々の異なる地域や地区から、あるいは異なる社会階層から等しく抽出することで、効率的かつ信憑性のより高い結果を導くサンプル抽出法であった。サンプルは、市民の氏名・住所の分かる選挙人名簿に基づき、ストリートごとにひとつを、距離の長いストリートからは 2 つを、2～3 の複数のストリートからひとつを抽出する基準で被調査者を決めた。この数学理論に基づく抽出法は、他にも大学研究機関での科学調査や企業調査で使用されており¹⁹⁾、ロンドン大学の統計数学者ボウリー教授の都市調査においても活用されてきたものだった²⁰⁾。回答エラーも想定すると、調査結果は、およそ回答率が 65～71% のあいだで最も高い信憑性が確認できるとされた²¹⁾。

面会質問票に基づく戸別インタビュー調査も戦時社会調査機関の適用した新しい方法だった。情報省は、面会調査を実施する 50 数名の女性調査員を採用し、調査法を修得した彼女たちは、質問票をもとに基本的に 1 日、8～15 名の聴き取り調査を行うこととされた²²⁾。被調査者の氏名・住所は極秘情報として扱われ、面会調査員は、回答者が答えに困っているような場合でも、意見・回答を間接的に誘導したりすることを禁止されている。調査結果

は、政策立案担当各省に閲覧可能なかたちで保管され、情報の公開が図られた²³⁾。また戦時社会調査は、政治に関する調査内容を対象外とし、調査結果を政党政治に利用することも禁じるなどあくまで「非政治的」な調査としての性格を持っていた²⁴⁾。戦時社会調査とは、まさに政府が人びとの本当に考えていることや感じていることを「発見」する行為であり、国民にとっては自分の声や要望を政府に伝える唯一の手段が与えられたことを意味したのであった²⁵⁾。その点でインタビュー調査は、戦時下の「民意」を直接的に汲み取る方法として最適であった。科学的調査により発見された「社会的事実」をもとに、政策立案者の議論をより現実的なものとし、戦後の政策形成に活かしていく「民主的プロセス」が目指されたのである。

さて、ミドルズバラ市の社会調査を統括したチャップマンは、ルイス・モス、およびミドルズバラ市当局に登用された都市計画家のマックス・ロック (M. Lock)²⁶⁾、社会学者のデイヴィッド・グラス (D. V. Glass)、都市農村計画省のジョージ・ペプラー (G. L. Pepler) と調査項目や質問票の項目について協議を重ね、社会構造（収入、社会階級、社会的地位、世帯規模、家族構成）および、人口流動性（社会的行動圏）を調査することに決めた。市当局から有権者名簿を入手し、インタビュー調査の対象世帯は、市内のあらゆる住区から公平に23世帯のうち1世帯の割合で無作為に抽出され、1,536世帯が抽出された。未回答の可能性も考慮に入れて、297世帯も追加された。調査員は、1944年6月から約6週間にわたって訪問調査を行い、30人の質問調査員は小グループに分かれ、代表者と助手が少なくとも主婦にインタビューをしていき、可能な限り男性労働者と女性労働者にも同様の質問を行っていった。1,387人の主婦、971人の男性労働者、238人の女性労働者がインタビューに答えた²⁷⁾。住民への質問には、「戦後に住みたい場所はどこですか」「戦後に住みたい場所を選んだ理由は何ですか」「初めてミドルズバラ市を訪問した人に観てもらうべき場所としてどこを勧めますか」「戦後に予想される問題は何だと思えますか」「戦後ミドルズバラ市が居住する場所として快適になるためには何がなされるべきだと考えますか」「ミドルズバラ市の再建問題とは何だと思えますか」「ミドルズバラ市内のどこに住みたいですか」「その地区を選んだ理由は何ですか」「別の住宅に移りたいか否か、その理由について」「庭の必要性について」「社会関連施設・娯楽施設の要望について」「社会関連施設・アメニティの利便性について」が質問された²⁸⁾。

2. ミドルズバラ市民の意識

(1) 魅力ある都市とその理由について

ミドルズバラの住民は、そもそも自分たちの住む都市をどのように思っていたのだろうか

か。表1は、ミドルズバラ市の男性労働者・女性労働者・主婦層を対象に「戦後に住みたい場所はどこですか」という質問に対する回答結果である。これをみると、ミドルズバラ市に戦後も住み続けたいと回答したのは、主婦で75%、男性で73%、女性で60%だった。全体的に6〜7割の住民がミドルズバラ市に住みたい気持ちを持っており、残りの2〜3割が他の都市を選んだ。移り住みたい別の都市・地域で多いのは、ミドルズバラのような工業都市とは性格を異にする「カントリーサイド」であり、自然環境の良さに憧れのあることが分かる。この他に様々な都市が挙げられているが、たいいていの都市が北部地域の都市であることにも注目したい。市民の約6割の出自が、ミドルズバラ市であることから中部や南部を好まず、北部地域に少なからず親近感を持っていることが指摘できよう²⁹⁾。「その他」では、ごくわずかの者が北東部の小都市や村を答えた。

表1：戦後に住みたい都市・地域

	主婦%	男性労働者%	女性労働者%
ミドルズバラ	75	73	60
ストックトン、レドカー、ソーンビー	2	3	3
ダーリントン、ハートリプール	1	1	—
ニューカッスル、スカーバラ	1	1	1
カントリーサイド（田園地方）	8	9	8
ロンドン	2	2	4
南部地域（特に指定なし）	2	2	3
その他	6	8	10
未回答	2	2	5
分からない	2	1	4
合計 （サンプル数）	100 (1,387)	100 (971)	98 (238)

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part II, p. 2.

注：複数回答のため合計が100%にならない。

チャップマンは、さらに上記の質問回答者のうち、主婦層のみを世帯収入別に分類し集計しなおした。これによると、所得の低い主婦層は市内を好み、所得の高い主婦層ほどカントリーサイドを好む傾向のあることが明らかになった。このことは、市中心部に低所得層が集住し、所得に余裕のある上層労働者階級や中産階級が次第に郊外へ転居していく20世紀初頭にみられた郊外化現象にあてはまるものである³⁰⁾。居住地タイプ別にみると、郊外の私有住宅地と労働者階級向けの公営住宅地に居住する者の75%、過密地域の住民の78%が同市に留まりたいと答えていることから定着率が比較的良好と言える³¹⁾。ではミドルズバラ市の居住希望を主婦の年齢別でみると、その違いはわずかな差でしかないが、34歳以下で71%、

表2：戦後に住みたい都市・地域を選んだ理由

	主婦%	男性労働者%	女性労働者%
ここで生まれたから、慣れ親しんでいるから	36	32	30
友人・親類の存在	12	6	17
仕事の関係	21	32	19
天候・衛生環境の良さ	8	9	8
移住するにはすでに高齢だから	4	4	2
カントリーサイドが好きだから	5	6	7
海が好きだから	2	2	—
アメニティの豊かさ	2	2	3
気に入っているから	11	11	11
移りたくないから	6	5	3
その他	6	6	5
未回答	6	8	9
サンプル	100 (1,387)	100 (971)	100 (238)

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part II, p. 3.

注：複数回答のため合計が100%以上になる。

35～44 歳で 72%，45～54 歳で 76%，55～60 歳で 76%，61 歳以上で 83%と高齢になるにつれて、ミドルズバラ市から移住しようとは思わない事実も判明した。では一般的に住みたい都市を選ぶ理由は何のようなものなのか、その理由の内訳が表2である。

ミドルズバラも他の都市も含めて住みたい都市を選ぶ理由には、主婦の場合、「ここで生まれたから、慣れ親しんでいるから」が36%、「気に入っているから」が11%、「移りたくないから」が6%、「移住するにはすでに高齢だから」が4%で合計57%と、実は、場所への漠然とした感情で選んでいることが分かる。ほかには「友人・親類の存在」が12%、「仕事の関係」が21%、「天候・衛生環境の良さ」が8%、「カントリーサイドが好きだから」が5%であった。これを所得階層別にみると、低所得層では、「ここで生まれたから、慣れ親しんでいるから」が最も多く、高所得層の21%に対して46%あった³²⁾。「移住するにはすでに高齢だから」「移りたくない」という理由も低所得層に多い。戦後の住宅建設計画では市民のこうした年齢・所得水準の違いによる要望のばらつきを考慮する必要が判明した。性別でみると、男性労働者の32%、女性労働者の19%が、「仕事の関係」と答えており、主婦・女性労働者にとっては「友人・親類の存在」が住みたい都市の選定にとって男性労働者以上に大きな要因となることが分かる。

(2) ミドルズバラ市民の誇り

チャップマンは、都市の再建には市民の都市への愛着を高めることが重要と考え、市民の「ローカル・アイデンティティ」の拠り所を確かめようと試みた。例えば、学校や救貧院、セントジャイル教会などの建物、フットボール・チームのようなクラブやアソシエーションのほかに、著名人、地域の特産物や伝統技術、地域産業などが想定された。建築家とは、市民の思いや誇り、市民生活といったものを理解してはじめて実際の都市景観や建築デザインを構想しうるものだとチャップマンは考えていた³³⁾。そこでミドルズバラの場合、市民はどのような場所を「誇り」と思っていたのだろうか。

表3をみると、回答の中で最も多かった場所が「公園」で、主婦の39%、女性労働者の34%、男性労働者の37%。「美術館、アート・ギャラリー」が次いで多く、主婦と女性労働者それぞれ24%、男性労働者23%。市北部の製鉄所付近の「ティーズ橋梁」を答えたのが男性労働者の33%、女性労働者の22%、主婦に19%いた。ミドルズバラ市の産業シンボルとして橋が挙げられているのは興味深い。そのほかに、緑の拡がる「郊外や新しい住宅地」も観る価値があるとの回答もある³⁴⁾。「その他」では「スラム」「キャプテン・クック生誕の地」「戦争記念碑」「教会」「学校」などが挙げられた。しかし一方で、主婦の32%、男性労働者

表3：初めてミドルズバラ市を訪問する人に勧めたい場所

	主婦%	男性労働者%	女性労働者%
公園	39	37	34
ティーズ橋梁	19	33	22
美術館、アート・ギャラリー	24	23	24
図書館	2	5	2
ドーマン・ロング橋梁、製鉄所、産業、港湾	5	19	4
市庁舎	8	12	6
郊外地、丘陵、海、レドカー地区、レドカー地区バス乗り場	9	11	8
コンスタンチン・コレッジ	2	3	2
店舗	6	2	7
その他	13	20	11
特になし、分からない	32	20	37
未回答	5	3	3
サンプル	100 (1,387)	100 (971)	100 (238)

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part II, p. 6.

注：複数回答のため合計が100%以上になる。

の20%、女性労働者の37%が「特になし、分からない」と答えていることも無視できない。全般的にミドルズバラ市民は外からの訪問客に特に自慢しうるような建造物や立派な観光地を持たなかったと言える。

(3) 戦後再建および都市・住宅問題についての意見

次にミドルズバラ市の戦後の問題に関する市民の意識をみてみよう。表4から分かることは、男性も女性も都市そのものの問題というよりも、生活そのものに関わる「失業」が最も深刻な問題として認識されている点である。この点で、ミドルズバラ市民の戦後再建についての関心のありどころが、何より個人的かつ現実的なところにあることが窺える。二番目に重要とみなされたのが、住宅問題であった。ミドルズバラ市では、マックス・ロックによる都市計画の立案に向けた取り組みが地方新聞でも取り上げられた1944年にあっても³⁵⁾、「全般的な戦後再建」への「関心度は高くなかった」ようである³⁶⁾。男性労働者の75%、女性労働者の53%、主婦の57%が「失業」問題を最重要課題と考えていたのである。次いで、「住宅」と答えたのは、それぞれ35%、45%、36%であった。被調査者の女性労働者の多くは未婚者が多かったので、将来、戦後に結婚した場合に必要とされる新しい住宅への希望が高かったと言えよう。男性労働者の7%、女性労働者の6%、主婦の7%が「貧困、賃金収入」の問題を指摘した。「全般的な戦後再建」と答えたのは、男性労働者の20%、女性労働者の11%、主婦の9%であった。男性労働者の5%、女性労働者・主婦の16%が、戦後の問題が何か「分からない」と無関心な態度も示した³⁷⁾。

表4：ミドルズバラ市の戦後再建問題とは何か

予想される戦後の問題	主婦%	男性労働者%	女性労働者%
失業	57	75	53
住宅	36	35	45
教育	3	3	3
貧困、賃金収入	7	7	6
全般的な戦後再建	9	20	11
分からない	16	5	16
その他	3	2	1
問題はない	—	—	—
未回答	3	2	3
サンプル	100 (1,387)	100 (971)	100 (238)

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part II, p. 9.

注：複数回答のため合計が100%以上になる。

チャップマンらは回答をさらに職業別・所得別に分類しなおしている。「全般的な戦後再建」を挙げた人の内訳を職業別に分類すると、事務職、専門職、経営者といった中産階層の人びとのあいだで関心が高く、未熟練労働者よりもかなり高い³⁸⁾。失業を心配したのは、単純労働者に最も多く、給士の夫を持つ妻で64%、専門職で61%、経営層で58%、事務職員で50%、産業別にみると、地方行政職の方が、港湾・運輸労働者よりも失業について心配している割合が高かった。住宅問題を挙げた割合も低所得層が28%いたのに対して、より所得の高い階層の人びとでは39%とより高かった。このことから所得のより高い階層・職種の人ほど戦後問題についての関心度が高いと言えよう。低所得者のあいだでは戦後の問題について「知らない」と答える傾向のあることも指摘された。過密地域の住民の回答には「意見なし」や、失業・不良住宅の問題についても関心度が低く、全般的に低い回答率を示していた³⁹⁾。

以上をまとめると、ミドルズバラ市の場合、何より、戦後も失業が続くのではないかというのが市民の大きな不安だった。そうした面で、男性労働者の方が、女性労働者・主婦よりも将来を心配しているのは理解できるとしても、高齢者と貧困者がこの問題に最も無関心だったことから、戦後再建に特別な期待を持っていなかったことや社会的関心の低さを指摘することができよう。

表5は、「戦後ミドルズバラ市が快適な住む場所となるためには何がなされるべきと考えますか」という質問に対する回答結果である。これは、ミドルズバラ市の都市計画に対する市民の要望としてみなされよう。一番多かったのが、「道路舗装・交通改善」で男性労働者の38%、女性労働者の27%、主婦の26%。二番目には、「スラムや老朽住宅の撤去」で各29%、20%、19%だった。「住宅建設」も同様に24%、21%、22%であり、男性労働者の12%、女性労働者の13%、主婦の7%が「公共レクリエーション施設の改善・新設」と答え、11%、10%、12%が、「学校や児童の遊び場の新設・改善」を挙げた。

都市計画について具体的に「未回答・分からない」と答えたのは男性労働者13%に対し、女性労働者28%、主婦29%とこれは女性の回答の中で一番多かった。収入別に分類すると、やはり低所得層の人びとにあまり明確な回答がみられず、高い関心を示したのが5ポンド以上の収入のある階層だった。「スラムの撤去」が最重要と答えた回答者の居住地区をみると、オームズビー地区、グロヴヒル地区、リンソープ地区、エルサム地区など実はスラムの存在しない地域住民に多く、逆にスラム除去で立ち退きを要求されることになるカノン地区、セイント・ヒルダ地区、ヴァルカン地区、アクラム地区、クリーヴランド地区、エクチェンジ地区の住民などで最も望まなかったのは興味深い。スラム撤去後に再開発がなされたとしても、彼らはもはや市中心部に戻ってくるつもりはなく、むしろ別の住宅地に移り住むことを望んでいたのである。

これを裏付けるものとして表6は、「市内のどの地区に住みたいですか」という戦後の住宅建設予定候補地とその人気度を窺い知るための質問に対する回答で、市中心部寄りの郊外

表5：ミドルズバラ市の再建計画

	主婦%	男性労働者%	女性労働者%
特に思い浮かばない、このままでよい	4	2	1
何も再建できやしないだろう	—	—	—
スラムや老朽住宅の撤去	19	29	20
住宅建設	22	24	21
道路舗装・交通改善	26	38	27
バランスのとれた新産業の導入	2	8	1
公共娯楽施設の設置	8	10	15
公共レクリエーション施設の改善・新設	7	12	13
学校や児童の遊び場の新設・改善	12	11	10
その他	11	17	11
既存住宅の修繕	4	4	2
未回答・分からない	29	13	28
サンプル	100 (1,387)	100 (971)	100 (238)

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part II, p. 11.

注：複数回答のため合計が100%以上になる。

住区のリンソープ、グロヴヒル、オームズビー地区の人气が最も高かった。その選択理由の内訳（主婦のみ）を示した表7によると、最も重要な理由は、衛生環境や住宅の良さに集約できる。

ミドルズバラ市民は、戦後、市中心部の産業集積地帯に居住し続けることよりも、緑豊かなアメニティの充実した郊外の新築のモダンな家に移り住み、衛生的な環境の中で生活していくことを望んでいた。特に若年と富裕層のあいだで郊外に移りたがる傾向が強く、結局、低所得層、高齢者層が旧市街に残留することが予想されることから、市中心部の急務な再開発が必要と判断された。

表1でみたように、ミドルズバラ住民の約6～7割は、戦後、同市に留まることを希望していたが、市内の移動については住民の7割近くがよりよい住宅に転居したいと考えていた。表8は、「新しい住宅に移りたいか否か、その理由」に対する回答で、主婦の71%、男性労働者の67%、女性労働者の74%が、今住んでいるところから別の家に移りたいと答えた。移りたい理由は上位から「バスルームが欲しい」「モダンな家が欲しい」「庭が欲しい」「今の家には機能施設が欲しい」だった。「今の家には機能施設」とは、具体的に、水洗式トイレ、現代的な暖房施設と台所、棚スペース、冷蔵庫、洗濯場、物置小屋などが挙げられた。「その他の欠点」とは、隙間風、湿気、不衛生、害虫の侵入、老朽化であった。「その他、よりよい条件を求めて」では、「ミドルズバラ市が嫌い」が一番多く、次いで「今と違った住宅が欲しい」「もっとプライバシーが欲しい」「今の近隣住人から離れたたい」だった。

表6：ミドルズバラ市内のどの地区に住みたいですか

	主婦%	男性労働者%	女性労働者%
エルサム	4	3	3
アクラム	3	2	3
カノン	1	2	—
クリーヴランド	3	3	3
エクスチェンジ	1	1	—
グロヴヒル	19	19	15
リンソープ	22	20	23
ニューポート	2	2	2
オームズビー	9	9	9
セイント・ヒルダ	1	1	1
ヴァルカン	1	1	—
フィニー・バンクス宅地（リンソープ）	4	4	3
ブランブルズ・ファーム宅地（オームズビー）	4	5	2
他の宅地（アクラム・ヴィレッジ）	14	15	17
マートン宅地（グロヴヒル）	3	4	7
小都市，村の郊外，ストックスリーほか	1	2	1
ミドルズバラ市内のどこでもない，分からない	5	5	5
未回答	1	1	2
その他，アルバート公園の近く	2	2	4
合計	100	100	100

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part III, p. 14.

注：複数回答のため合計が100%以上になる。

3 部屋に 5 人以上同居している世帯が最も転居を希望した。世帯人数と住宅サイズの不適合という問題も転居の希望と関連のあることが判明した。

結果，大人の 3 分の 2 以上が新しいモダンな住宅を希望していた。問題は，特に都市中心部の老朽化した住宅の集まる地区に住む人の実に 5 分の 4 以上が移住したがっているという事実であった。彼らの現在住んでいる住宅への不満とは，その住宅の質のみならず，近隣住区の持つ社会的特性にも関連していることから，ある程度，近隣の人間関係も移動の動機の要因に入っていることが分かった。住宅サイズも重要で，極めて小さいサイズの住宅は，たとえ 1～2 人の世帯にとっても不満と感じられた。

表 9 は，上記で「移りたい」と答えた人に，戦後の住宅に「庭が欲しいかどうか」質問した結果である。庭，菜園，風呂の希望が聞かれた。回答者のほとんどが庭の所有を望んでいることが判明した⁴⁰⁾。主婦の 77%，男性労働者の 74%，女性労働者の 80% が新しい家に庭

表7：住みたい地区を選んだ理由

理由	主婦%
より衛生的、空気がきれい、子供にとってよい環境	31
田舎が好きだから、開放的だから	29
住宅の良さ	21
地域が好き	23
親類・友人が近くにいる	6
そこの住人が好きだから	5
職場に近いから	7
店が豊富にあるから	4
中心地だから	11
慣れているから、いつもここに住んでいるから	13
未回答	8
その他	10
サンプル	100 (1,387)

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part III, p. 14.

注：複数回答のため合計が100%以上になる。

のあることを望んだ。加えて、13%、18%、13%が庭と菜園の両方を望んだ。いずれにせよ、庭付き住宅の需要が圧倒的に高く、戦後の住宅計画にとって欠かせないものであることが判明した。

(4) 生活関連施設・レジャー施設に関する意識調査

住宅のほかに地域コミュニティの再建に必要な生活関連施設・レジャー施設についての要望を検討しよう。表10は、「地域にどのような施設が欲しいですか」という質問の回答結果である。男女労働者とも、運動場・遊び場やスイミングプール、遊興施設といったレジャー施設を強く要望していた。次いで、劇場、衛生クリニックが次いだ。一方、集会所に対する要望は半数以下と低く、実際、「クラブ・集会所」の利用率は、男女労働者の39%、主婦の19%と極めて低かった。このことは近隣住民同志で集い、社交活動を行うことにもはや魅力を感じていないことを示していよう。「スポーツ・グラウンド」は、自らスポーツをすることよりも、試合観戦で利用する割合が高く、男女労働者の43%が楽しんでいた。また「パブ」は男女労働者の55%が利用するのに対して主婦では20%だった。「レストラン」は、主婦の29%、男女労働者の24%が利用し、私有住宅地に住んでいる、より高所得層に頻度が高かった⁴¹⁾。

表11は、生活関連施設の利便性についての意識調査である。利便性は、自分の家と利用

表8 新しい住宅に移り住みたいか否か、その理由は何ですか

新住宅への希望	主婦%	男性労働者%	女性労働者%
移りたい	71	67	74
移りたくない	28	32	22
分からない	1	1	3
未回答	—	—	1
サンプル	100 (1,387)	100 (971)	100 (238)
移りたい理由			
モダンな家が欲しい	41	35	43
バスルームが欲しい	47	45	45
モダンな台所が欲しい	17	10	20
今の家にはない機能施設が欲しい	32	26	29
大きい家が欲しい	21	21	16
小さい家が欲しい	11	7	8
庭が欲しい	28	35	28
湿気・不衛生だから	6	5	2
日当たりが悪いから	2	2	3
その他の欠点	10	10	6
未回答	1	1	—
その他、よりよい条件を求めて	37	35	45
総計（移りたい人）	100 (983)	100 (653)	100 (177)
移りたくない理由			
この住区が好きだから	39	39	—
住民が好きだから	20	20	—
家を気に入っているから、慣れているから	71	69	—
未回答	6	9	—
その他、よりよい条件がそろっているから	9	8	—
持ち家だから	8	10	—
職場が近いから	7	5	—
総計（移りたくない人）	100 (389)	100 (308)	—

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part III, p. 28.

注：複数回答のため、「移りたい理由」「移りたくない理由」の総計は100%にならない。

表9 庭の所有についての希望調査

	主婦%	男性労働者%	女性労働者%
庭の所有を望む	77	74	80
庭と菜園の両方を望む	13	18	13
どちらも望まない	7	6	5
未回答	3	2	2
サンプル	100 (983)	100 (653)	100 (177)

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part III, p. 32.

表10 生活関連施設・レジャー施設の要望（男性労働者・女性労働者）

アメニティ	もっと欲しい		要らない		意見なし	
	男性%	女性%	男性%	女性%	男性%	女性%
公園	52	55	46	38	3	6
集会所	46	41	44	40	10	19
図書館	67	59	27	31	6	10
劇場	72	77	24	16	4	6
映画館	28	37	69	58	3	5
ダンスホール	23	43	65	48	12	9
運動場・遊び場	86	81	11	13	3	6
遊興施設	81	81	11	12	8	7
スイミングプール	82	80	14	14	4	6
看護学校	55	59	23	23	22	18
公衆洗濯場	24	16	58	73	17	11
衛生クリニック	72	73	18	16	10	11

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part III, p. 23.

施設までの移動距離と移動時間に大きく左右されるが、交通機関を利用する外出の場合は、交通費をまかなえる余裕の有無の違いも出てくることが予想される。「職場」「郵便局」「公園（代表的な公園3つ）」「教会」「ショッピングセンター」について、「どのくらいの頻度で行きますか」「移動にはどれくらい時間がかかりますか」「どれくらい遠いですか」「どうやって行きますか」「あなたの家から近いですか遠いですか」という質問がなされた。移動時間は12分以内、12～22分、23～40分で分類した。回答者が「便利」と「不便」と感じる移動距離の差を調べるために調査者は、「不便」だと感じられた場合の所要時間と距離を測定し、平均値を出した。

「職場への移動」を「不便」だと感じたのは、その距離が自宅から3.5マイル以上で、22

表 11 生活関連施設・アメニティについての利便性

場 所	主 婦				男性・女性労働者			
	サンプル数	便利%	不便%	未回答%	サンプル数	便利%	不便%	未回答%
職場	1,387	—	—	—	985	82	14	4
郵便局	1,387	93	5	2	1,209	87	3	10
アルバート公園	1,387	69	20	11	1,209	72	17	11
スチュアート公園	1,387	26	56	18	1,209	31	50	19
パリストアー公園	1,387	25	52	23	1,209	29	49	22
教会	816	89	8	3	491	85	7	7
ローカル・ショッピングセンター	1,387	91	3	6	—	—	—	—
中央ショッピングセンター	1,387	92	3	5	—	—	—	—

出典：A Social Survey of Middlesbrough, Part VI, p. 31.

分以上かかるところに落ち着く。男女の労働者の場合、14%が不便と答えている。低所得層の方が、高所得層より、不便に感じる割合が高い（低所得層：21%，中間・高所得層：13%）⁴²⁾。しかし全般的に 82%が職場への移動を「便利」と答えていることから、ミドルズバラ市の低所得労働者の大多数は実際、職場の近くに居住していることが分かる。「郵便局」は、市民に年金と福祉手当を支給する場所として重要な存在であった。郵便局から遠いところに住んでいる人はほとんどいないことが判明した。「公園」へのアクセスについては、市中心部に位置するアルバート公園と郊外にある 2 つの公園が対象とされた。利便性は各回答者の住む場所に左右されるが、主婦にとって、アルバート公園に関しては、半マイル以上の距離で不便と感じられ、スチュアート公園では 1.2 マイル以上でかなり不便と感じられている。市の中間部にあるパリストアー公園でも同様であった。表 11 から分かることは、公園へのアクセスが市民にとって一番、「不便」であったことである。

主婦にとってショッピングセンターの利用ほど大事なものはない。ほとんどのローカル・ショッピングセンターは、各自宅から 850 ヤード圏内にあり、12 分以内のところにあって不便さは感じられていない。利用頻度と利便性の関連性も考慮に入れると、毎日利用する主婦の 96%が、週 2 ～ 3 回の利用者の 93%が、週 1 回利用者の 89%がローカル・ショッピングセンターを便利に思っていることも判明した。中央ショッピングセンターについては、12 分以内の圏内にあるリンソープ・ロードやコーポレーション・ストリートに住む主婦にとって 95%が便利と感じていた。所要時間が 12 ～ 22 分以内に住む人にとっては、92%が、23 ～ 40 分の人で 90%が便利に思っている。地区別にみると、アクラム、クリーヴランド、エクステンジ（92%）、オームズビー（89%）が相対的に高く、エルサム（76%）が、相対的に低い。また、労働者階級住宅地で購買施設の不足が判明した⁴³⁾。全般的にみて、ロー

カル・ショッピングセンター、中央ショッピングセンターへのアクセスについてはおおよそ不便だということはなかった。ミドルズバラ市の場合、公園以外の生活関連施設・アメニティへのアクセスで不便なところはなかったと言える。

おわりに

以上みてきたように社会学者チャップマンと助手たちはサンプル抽出と戸別面会調査でミドルズバラ市民にいくつかの質問をし、男女の労働者と主婦層のミドルズバラ市への思いや見解、戦後の都市・住宅再建問題、地域コミュニティでの生活上の問題点、そして戦後社会に対する要望を直接聴き取った。本社会調査から浮かび上がる第二次世界大戦期ミドルズバラ市の地域社会問題や市民の見解・要望を以下にまとめてみよう。

ミドルズバラ市の問題とは、中心部北側に位置する製鉄工業集積地帯の労働者住宅群（スラム地区）の住宅・衛生環境の悪さ、市全体における緑地スペースの不足（住民にとって公園へのアクセスが不便と感じられたこと）、若者にとっての娯楽施設の不足（ただし集団活動を促す集会所は半数近くが望まなかった）、そして何よりミドルズバラ市には他都市に積極的に誇れる魅力的なモノがないことであつた。そこで住民の多くは、戦後に市中心部よりも環境のよい郊外にモダンな庭付き住宅に移り住むことを希望していた。しかし市民の戦後についての最大の関心事とは、長期的視点に立つような都市計画になく、むしろ、個人的な心配事である失業や住宅なのであつた。戸別訪問面会調査での市民の反応は、チャップマンらにとっては「おおむね協力的」⁴⁴⁾と映つたが、前章の一連の表群でみたように、高所得層より低所得層のあいだで、そして男性より女性のあいだで「都市問題」への関心があまり積極的にみられなかったし、明確な見解を表明できなかった人も一定程度存在していた事実も無視できない。また本稿では全ての質問項目については検討しなかったが、回答結果を様々な基準で整理しなおすと、性・収入・年齢・居住地区で回答の仕方・内容に差が生じることも新しい発見であつた。いずれにせよ、ミドルズバラ市民が同じ都市コミュニティに居住する者として決して一様な見解を持っていたわけではなく、ひとつの都市内においても市民の多様な要望や見解が明らかになったことの意義は大きく、この点においてチャップマンの報告書は、後に民意を反映した都市計画の策定に役立つ材料となりえることで価値のある調査だったと言える。

こうした被調査者の要望・見解を直接的に汲み取る戦時社会調査機関の実践とは、政府と国民の距離をこれまでにないほど縮めたことを意味したと言える。オックスフォード大学の社会学者ハルゼーによれば、1930年代から1940年代にかけてイギリス社会学（統計社会学）におけるサンプリング法は飛躍的に発達し、量的方法と質的方法からなる科学的統計手法に基づく社会調査が戦後の民主的な福祉国家の実現に欠かせないものとして次第に認識され始

めたのだった⁴⁵⁾。イギリスは1930年代の大不況を経験することで戦前までのレッセ・フェールの限界に直面した。そこで政府介入主義の必然性が高まり、当時台頭してきた専門家集団による「計画化」に基づく社会問題の解決法に期待が集まった。本稿で検討してきたチャップマンによる『ミドルズバラ市の戦時社会調査』が、このあと都市計画家のマックス・ロックの手に渡り、ミドルズバラ市の再建計画が作成されていく中で、本調査報告書の内容が果たしてどの程度吟味され、最終的に1947年の「民主的な」ミドルズバラ市再建計画⁴⁶⁾に結実していくのだろうか、そのプロセスの検討は今後の課題としたい。

* 本稿は平成23年度科学研究費補助金若手研究(B) 課題番号22730281「戦後復興期イギリスの『民主的』変革と都市計画に関する実証研究」(研究代表者: 本内直樹)の研究成果の一部をなす。

注

- 1) National Archives [hereafter, N. A.], INF 1/263, 'Wartime Social Survey: A Guide for Local Information Committees and Social Survey Interviewers,' February 1942, pp. 1-6. 戦時社会調査機関の内情については、L. Moss, *The Government Social Survey: A History*, 1991, London: H. M. S. O., pp. 5-25 に詳しい。
- 2) N. A., INF 1/263, 'Organisation of the Wartime Social Survey,' n.d. but 1940, pp. 1-3.
- 3) N. A., INF 1/263, 'Affairs of the Wartime Social Survey,' 15 August 1940, p. 1.
- 4) *Evening Standard*, 4 September 1941. 再編にあたり経済社会研究機関The Institute of Economic and Social Researchからの資金援助を断ち、今度は情報省の財務部局で調査予算が組まれることになった。(N. A., INF 1/273, 'Memorandum on the Organisation of Wartime Social Survey,' pp. 1-9.)
- 5) N. A., INF 1/281, 'The (Wartime) Social Survey, Memorandum by the Ministry of Information,' n.d. but 1941, p. 1.
- 6) N. A., INF 1/263, 'Ministry of Information: Wartime Social Survey,' 15 August 1940. 1943年には17件の調査が終了し、終戦時まで以下に以下の省・研究部所からの依頼に基づく調査が実施された。Ministry of Health, Ministry of Food, Department of Health for Scotland (Housing section), Ministry of Agriculture, Ministry of Town and Country Planning, Ministry of Works, Department of Scientific and Industrial Research, Building Research Station, Ministry of Fuel and Power, Board of Trade, Industrial Design Council, Ministry of Labour, Industrial Health Research Board, Ministry of Transport, Central Statistical Office.
- 7) G. D. H. コールの下、オックスフォード大学ナフィールド・コレッジによる社会再建調査The Nuffield College Social Reconstruction Survey, また社会経済問題についてはPolitical and Economic Planning (PEP) やNext Five Yearsグループが市場調査を実施しており、1940年代の政策形成に向け、様々な報告書を準備していた。
- 8) P. Summerfield, 'Mass-Observation: Social Research or Social Movement?,' *Journal of Contemporary History*, vol. 20 (1985), pp. 439-452.
- 9) J. Hasegawa, 'The Rise and Fall of Radical Reconstruction in 1940s Britain,' *Twentieth Century British*

- History*, vol. 10, No. 2, (1999), pp. 137-161.
- 10) N. A., HLG 79/457, letter from Pepler to Ministry of Information, the Secretary, 12 May 1944. 都市農村計画省によってミドルズバラ市が選定された理由は、1943年にミドルズバラ市議会により外部専門家として登用の決まった都市計画家マックス・ロックが、都市農村計画省や情報省と積極的に交渉し、戦時社会調査機関の協力の下で都市調査を実施できないかどうか打診したことによるものだった。
 - 11) ミドルズバラの都市史については19世紀を対象としたものにA. Briggs, *Victorian Cities*, London, 1993, pp. 241-276; M. Yasumoto, *The Rise of a Victorian Ironopolis*, Boydell Press, 2011; 安元稔『製鉄工業都市の誕生』名古屋大学出版会、2009年がある。
 - 12) ミドルズバラ市の失業率は1926年で34.5% (全国平均12.5%)、1931年で41% (同21.3%)、1949年で20% (同10.5%) と極めて高かった。K. Nicholas, *The Social Effects of Unemployment in Teesside*, Manchester University Press, 1986, p. 25. また鉄鋼業はイングランドの全産業の中でも高い失業率を示した。1938年時点の失業率は、鉄鋼業 (24.8%)、石炭業 (22.0%)、綿工業 (22.7%)、造船業 (21.4%)、全産業の平均 (13.3%)。J. Stevenson, *British Society 1914-1945*, Penguin, 1990, p. 270.
 - 13) チャップマンは、労働者階級出身で、労働組合に加盟していた。ロンドン政治経済学院を卒業後、ラウントリのヨーク市貧困調査の助手をした後、1935年にスコットランド東部のダンディーの繊維産業労働者の失業問題について、1938～39年にはマス・オブザベーション・グループにも参加し、イングランド北西部ボルトン工業都市の労働者の社会生活について調査していた。チャップマンについては、N. Hubble, *Mass-Observation and Everyday Life*, Palgrave, 2006, pp. 7-8 and p. 117.
 - 14) D. Chapman, *A Social Survey of Middlesbrough; An inquiry into some of the factors relevant to the planning of urban communities made for the Ministry of Town and Country Planning*, New Series, No. 50, September 1945. 本資料はPart I (Introduction to Social Data), Part II (Attitudes to Middlesbrough), Part III (Public Opinion in relation to planning and housing in Middlesbrough), Part IV (Social Relations), Part V (Social Activities and Leisure), Part VI (Convenience), Part VII (Shopping), Part VIII (Miscellany) からなる。Part I と Part II は1946年1月に出版。
 - 15) 拙稿「第二次世界大戦期イングランド北東部の都市労働者・主婦層の居住環境と友人・隣人関係―『ミドルズバラ市の戦時社会調査』の資料から―」『国際比較研究』(国際比較研究会) vol. 7, (2011), 3-33頁。
 - 16) さしあたりH. L. Smith(ed.), *War and Social Change: British Society in the Second World War*, Manchester University Press, 1986; B. Brivati and H. Jones, *What Difference Did the War Make?*, Leicester University Press, 1993; S. Fielding, P. Thompson, N. Tiratsoo, "England Arise!": *The Labour Party and Popular Politics in 1940s Britain*, Manchester University Press, 1995を挙げておく。
 - 17) イギリス社会調査の発展史や戦後イギリス社会学の動向については、M. Abrams, *Social Surveys and Social Action*, London, 1951, pp. 81-113; F. Whitehead, 'The Government Social Survey', in M. Bulmer (ed.), *Essays on the History of British Sociological Research*, Cambridge University Press, 1985, pp. 83-100; A. H. Halsey, 'Provincials and Professionals: The British Post-War Sociologists' *LSE Quarterly*, vol. 1, no. 1 (1987) pp. 43-74; A. H. Halsey, *A History of Sociology in Britain: Science, Literature and Society*, Oxford University Press, 2004 (A. H. ハルゼー著、潮木守一訳『イギリス社会学の勃興と凋落』世織書房、2011年) などがある。
 - 18) C. A. Moser, *Survey Methods in Social Investigation*, London, 1958, pp. 24-26.
 - 19) N. A., INF 1/263, 'Wartime Social Survey: Sampling Method Employed,' 16 August 1940.
 - 20) A. L. Bowley and A. R. Burnett-Hurst, *Livelihood and Poverty, A Study in the Economic Conditions of*

- Working Class Households in Northampton, Warrington, Stanley and Reading*, London, 1915; A. L. ボウリー(友枝敏雄・速水聖子・土井文博訳)『計量社会学の誕生』文化書房博文社, 2001年。
- 21) note in 19.
- 22) 戦時下, 市民にとっては訪問調査員を「スパイ」snooper と不審に思う風潮もあり, 戦時社会調査機関は批判されもした。 *Daily Telegraph*, 8 November 1941.
- 23) N. A., INF 1/263, 'Ministry of Information: Public Opinion Studies by Wartime Social Survey,' 15 August 1940, p. 2.
- 24) C. A. Moser, *Survey Methods in Social Investigation*, London, 1958, pp. 24-26.
- 25) N. A., INF 1/263, 'Ministry of Information: Wartime Social Survey,' 15 August 1940, p. 1.
- 26) Teesside Archives, Middlesbrough Town Council Minutes, Joint Reconstruction Committee, 13 April 1944. ロック自身もチャップマンの社会調査を補完する形で独自の包括的な都市調査(特に交通・産業・コミュニティなどのフィールド調査)を実施する意図を持っており, ロックと市当局は戦時社会調査機関への政府追加予算を打診したが, 折衝の末, 最終的に都市農村計画省はこれを却下した。N. A., HLG79/457, letter from P. Kitchen to G. L. Pepler, 7 March 1944; 'Middlesbrough-Wartime Social Survey,' 15 March 1944; letter from Lock to Pepler, 20 March 1944; letter from Pepler to Taylor, 30 March 1944 and 14 April 1944; letter from Lock to Holford, 24 April 1944.
- 27) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part I, p. 4.
- 28) *Evening Gazette*, 22 June 1944.
- 29) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part I, p. 11. 主婦の場合, 19~34歳の25%が³, 60歳以上の54%が地元出身であり, 男性労働者については, 19~34歳の33%, 60歳以上の64%であることから, ミドルズバラ市は「居住, 仕事をする場所として若者を惹きつける魅力に全く欠けている」ことが問題であった。
- 30) イングランド労働者階級の郊外居住については, M. Clapson, *Suburban Century*, Berg, 2003, pp. 51-58.
- 31) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part II, p. 2.
- 32) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part II, p. 3.
- 33) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part II, p. 4.
- 34) 1,096戸の住宅と社会施設を含むMarton Grove Estate建設計画とBrambles Farm Estate拡張計画が発表され, 市民に注目されていた。 *Evening Gazette*, 8 February 1943; 24 February 1943.
- 35) *Evening Gazette*, 11 November 1943.
- 36) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part II, p. 9.
- 37) *Evening Gazette*, 19 June 1944.
- 38) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part II, p. 10.
- 39) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part II, p. 11.
- 40) 大戦間期のイングランド労働者階級の「庭付き住宅」への人気の高まりについては, 荒井政治『レジャーの社会経済史』東洋経済新報社, 1989年, 291-332頁を参照のこと。
- 41) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part VI, pp. 18-24.
- 42) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part VI, p. 26.
- 43) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part VI, p.31.
- 44) *A Social Survey of Middlesbrough*, Part I, p. 5.
- 45) A. H. Halsey, *A History of Sociology in Britain: Science, Literature and Society*, Oxford University Press, 2004, p. 40. (A. H. ハルゼー著, 潮木守一訳『イギリス社会学の勃興と凋落』世織書房, 2011年, 78頁。)

- 46) M. Lock, *The County of Borough of Middlesbrough Survey and Plan*, The Middlesbrough Corporation, Yorkshire, 1947.

(2011年10月27日 受理)